

第 12 回市史講座ミニレポート：平成 28 年 3 月 18 日（土）

「松江市史から古代の出雲を考える」

講師：吉松大志先生（島根県古代文化センター主任研究員）



『松江市史』史料編「古代・中世 I」、通史編「自然環境・原始・古代」の刊行により、古代出雲の歴史を豊かに描き出すことや、さまざまな視点から古代出雲の特質を探り出す事が可能になりました。

吉松先生は、今回の講座で先ず、「出雲から都へどんな物が運ばれ、朝廷を支えたのだろうか」という疑問を提起され、「天皇に捧げられた出雲の品々を分

析することで、古代国家が出雲をどんな地域として位置づけ、出雲が古代国家においてどのような役割を果たしたかが見えてくるのではないか。」と、解決の視点を示されました。

出雲から都へ運ばれた品々を一覧表で示され、臨時の進上物には、白鳥、玉など、出雲だけが進上する、「出雲ブランド」とでも呼べる産品があることを示されました。

ところで、『日本書紀』には、「成人しても言葉を話さなかった御子が、白鳥の音を聞いて初めて声を発し、天皇の命で出雲の地で白鳥を捕獲したところ、言葉を話せるようになった」という伝承（ホムチワケ伝承）が出雲や古志(こし)と関連して記されています。吉松先生は、この伝承と白鳥の飛来地との関連を調べられ、現在も出雲や越(こし)の地には白鳥が多く飛来することに注目されました。

また、天皇の靈威を高める出雲の玉は、天皇の列島支配の思想的根拠となった「国譲り神話」の重要なアイテム（品目）だったとされました。

最後に、『松江市史』の発刊によって松江市域の古代文献史料が揃ったことから、今後の調査・研究の進展に期待できる、と結ばれました。